地域の移動と人口構成

三宅村は大阪府三島郡の南部に位置し、東海道線（四国電気鉄道線）を通り、千里丘車両基地に隣接する。三宅村の農業は水稲を主体としており、農業の収穫状況は第1表に示すように、昭和20年頃から増加傾向にあり、昭和30年までに達する。昭和30年以後は、車両基地の建設により、人口の増加が停止した。

吉井 藤 重 郎
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>年</th>
<th>1913</th>
<th>1914</th>
<th>1915</th>
<th>1916</th>
<th>1917</th>
<th>1918</th>
<th>1919</th>
<th>1920</th>
<th>1921</th>
<th>1922</th>
<th>1923</th>
<th>1924</th>
<th>1925</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>15</td>
<td>17</td>
<td>19</td>
<td>21</td>
<td>23</td>
<td>25</td>
<td>27</td>
<td>29</td>
<td>31</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>15</td>
<td>17</td>
<td>19</td>
<td>21</td>
<td>23</td>
<td>25</td>
<td>27</td>
<td>29</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>15</td>
<td>17</td>
<td>19</td>
<td>21</td>
<td>23</td>
<td>25</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
<td>30</td>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>16</td>
<td>18</td>
<td>20</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td>26</td>
<td>28</td>
<td>30</td>
<td>32</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（抜粋）
地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。

地域の移動と人口構成

実現し得ないことが明らかに、特に著しい人口増加が宇野町、太中、小坪井に見られるとは、それがあらゆる交通機関の整備不備に起因する。特に宇野町、太中、小坪井における交通機関の整備不備は、特に著しい人口増加を招く。したがって、これらの地域で、特に著しい人口増加が見られるには、交通機関の整備不備に起因するものと考えられる。
地域的環境と人口構成

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>地方</th>
<th>地方</th>
<th>大都市</th>
<th>外部市</th>
<th>外部県</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>17</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>8</td>
<td>14</td>
<td>18</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）
昭和25年三宅村人口（距離別）移動表

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>転入</th>
<th>転出</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>都市</td>
<td>150</td>
<td>249</td>
<td>399</td>
</tr>
<tr>
<td>郡部</td>
<td>59</td>
<td>81</td>
<td>140</td>
</tr>
<tr>
<td>郡内移動</td>
<td>40</td>
<td>77</td>
<td>117</td>
</tr>
<tr>
<td>郡部</td>
<td>56</td>
<td>53</td>
<td>109</td>
</tr>
<tr>
<td>郡外移動</td>
<td>45</td>
<td>16</td>
<td>61</td>
</tr>
<tr>
<td>都市</td>
<td>100</td>
<td>64</td>
<td>164</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>450</td>
<td>540</td>
<td>990</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）
近距離移動 = 大阪府内移動
中距離移動 = 近畿内移動
遠距離移動 = 近畿以外移動

昭和25年三宅村人口（距離別）移動表

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>転入</th>
<th>転出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>都市</td>
<td>119</td>
<td>180</td>
</tr>
<tr>
<td>女性</td>
<td>116</td>
<td>162</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>235</td>
<td>342</td>
</tr>
<tr>
<td>郡部</td>
<td>100</td>
<td>96</td>
</tr>
<tr>
<td>女性</td>
<td>115</td>
<td>102</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>215</td>
<td>198</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>450</td>
<td>540</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）T.3より算出

当地域の関係上同一の者が2度以上数えられるから、このことは注意に値する。

9
(一五一)
1 地域の移動と人口増減

2 巨大都市の郊外特に住宅地としての郊外には二つの大形態を考えられる。それは中心都市の沿辺に在って中心都市と地域的連関を完全に絶隔しており、中心都市に通ずる交通線沿線の停車場を小支点として、その周辺に形成される住地である、他のは中心都市から成る部を離れており、特に背後地との連関が不十分であるが、中心都市との地域的距離を考慮からされる。後者は不動地郊外に呼んで両部を区別する所をここに立てる。

最後に、昭和二十五年度の人口移動において、闊出人口数が僅か乍らも闊入人口数を凌駕している點についていれば、前表によると、現在住地別に整理することは出来ないので、昭和二十年の闊入人口を、前住地別に整理すると（第7表）

3 地域移動と人口増減

4 巨大都市の郊外特に住宅地としての郊外には二つの大形態を考えられる。それは中心都市の沿辺に在って中心都市と地域的連関を完全に絶隔しており、中心都市に通ずる交通線沿線の停車場を小支点として、その周辺に形成される住地である。他のは中心都市から成る部を離れており、特に背後地との連関が不十分であるが、中心都市との地域的距離を考慮からされる。後者は不動地郊外に呼んで両部を区別する所をここに立てる。

最後に、昭和二十五年度の人口移動において、闊出人口数が僅か乍らも闊入人口数を凌駕している点についていれば、前表によると、現在住地別に整理することは出来ないので、昭和二十年の闊入人口を、前住地别に整理すると（第7表）

## T.7 昭和20年住地別
三宅村闊入人口表

<table>
<thead>
<tr>
<th>前住地</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>合計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大阪市</td>
<td>246</td>
<td>323</td>
<td>569</td>
<td>30.4</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪市の 郊外</td>
<td>144</td>
<td>114</td>
<td>268</td>
<td>13.9</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>390</td>
<td>437</td>
<td>827</td>
<td>44.3</td>
</tr>
<tr>
<td>隣接町村</td>
<td>40</td>
<td>65</td>
<td>165</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>三島郡内</td>
<td>15</td>
<td>23</td>
<td>38</td>
<td>2.0</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪府内</td>
<td>36</td>
<td>29</td>
<td>65</td>
<td>3.5</td>
</tr>
<tr>
<td>県 内</td>
<td>119</td>
<td>86</td>
<td>205</td>
<td>11.0</td>
</tr>
<tr>
<td>その 他</td>
<td>195</td>
<td>213</td>
<td>408</td>
<td>21.9</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>405</td>
<td>416</td>
<td>821</td>
<td>44.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>前住地</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>合計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大阪市の 郊外</td>
<td>206</td>
<td>2</td>
<td>208</td>
<td>11.2</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>214</td>
<td>4</td>
<td>218</td>
<td>11.7</td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td>1009</td>
<td>857</td>
<td>1866</td>
<td>100.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>
三宅村の一単位をなす蔵全内部落の名張十二年以後の人口増加率は、昭和十年以後第十八年の平均は12.2%（第三位）で、昭和二十六年第七月現在人口数に対する比率は2.4%（第四位）であるが、昭和十年以後の人口増加率は、昭和十年以後第十八年の間に72.2%（第二位）の増加を示す（第2表）。また、昭和二十五年の人口増加率（第4表）も、もし被此の増加率及び移動率の多少と部落統合に対する影響度を測るならば、蔵全内部落はその人口増加による都市化の度合において三宅村諸部落の中、中位にあつまることが出来る。それでも、部落の選択的な都市化の度合を考慮するには、昭和十年以後第十八年の人口増加率を考慮する必要がある。

（2）外洋式及び村内移住者に対する影響力は同様に計算し、蔵全内部落の都市化の度合を考慮する。その結果、蔵全内部落は三宅村の都市化の度合に対して、特に都市化の度合が高いことが示される。このことから、外洋式及び村内移住者に対する影響力は同様に計算し、蔵全内部落の都市化の度合を考慮する必要がある。
<table>
<thead>
<tr>
<th>T.8 蔵原内人口移動数（昭和25年1月～昭和26年8月）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>出人</td>
</tr>
<tr>
<td>轉</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計計</td>
</tr>
<tr>
<td>順位</td>
</tr>
<tr>
<td>転入</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計計</td>
</tr>
<tr>
<td>順位</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
</tr>
<tr>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>順位</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注(1)三宅村役場根據種別図表によって集計した。
注(2)近距離も近距離市及び近距離郡内に存在するものとして
対照した。特に高槻市及び茨木市の離距離の郡区内に存在する
として表を作成した。以下T.9, 13, 17も同様。
接都市が夫々八・五％を示している。中距離及び遠距離の都市との移動は殆どなく、これに反して、都市移動は二三・〇％で、その大部分は味噌町及び山田村から来て居る。所謂、千里丘住宅地帯内の移動と見做すことが出来る。転出においては郡内の中距離移動は八・五％を示して大阪市に次いで多い。かつして第7表から都市内の移動方向をも観察してみた場合大都市及び衛星都市の内に於て都市内に居住を求めることの困難な場合に遭遇した一部人口は、勢たち外に流入させざるを得なくなる。此の傾向は、昭和十四年前、都市の最も都市化と共に都市内都市の発達が速さて、都市の発展が理解されるべきである。又、昭和三十年千里丘停止場開設後及び戦時中都市の発展はやや遅れをし、かつて人家の全存在しなかった地域が今日見られる如き住宅帯を形成した。停止場の東西に高層地の故に次第に住宅が増加し、かつて人家の全く存在しなかった地域が、小冊の二都市と共に都市内都市の発展を著しくし、特に西側は丘陵及び住宅地に好適な高層地の故に次第に住宅が増加し、かつて人家の全く存在しなかった地域が、各自の

業者と地主との協力によって建築されたものと言われ、十二軒長屋と俗称される。
<table>
<thead>
<tr>
<th>人口</th>
<th>35</th>
<th>17</th>
<th>17</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>住者</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>非住者</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>内地</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>外地</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1. 地域の移動と人口構成

二、三の長屋住宅が出ている、某有力地主の設立によって部落内に数世帯を収容得る空隙が生じた。かくの如くして来

九表、第一表によって観れば、都市よりの来住数及び町村よりの来住数は、昭和十二年以後の来住者は全来住の九三・一％を占め、

所調、新社会に対する新世帯を代表するものである。これらの来住者が蔵元内部の部落内に宿居する原住世帯の一・八倍に達している。即ち第

の来住世帯が四三（七ニ・三％）特に大阪市よりの来住世帯は三五（五八％）に達する。

1.9 部落内来住世帯数の職業別分布
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1000</th>
<th>65</th>
<th>43.6</th>
<th>26.5</th>
<th>14.6</th>
<th>23.8</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
<th>65</th>
<th>17</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### T.10 都市別囲策内来往世帯前住地
(カツコ内は出生地)

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>1897~1916</th>
<th>1917~1938</th>
<th>1937~1942</th>
<th>1943~1945</th>
<th>1946~1951</th>
<th>計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>郡部</td>
<td>0 (1)</td>
<td>2 (5)</td>
<td>1 (6)</td>
<td>12 (2)</td>
<td>16 (8)</td>
<td>42</td>
<td>27.7 (62.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>市部</td>
<td>1 (0)</td>
<td>2 (1)</td>
<td>8 (5)</td>
<td>11 (6)</td>
<td>20 (10)</td>
<td>42</td>
<td>72.3 (37.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>32</td>
<td>58</td>
<td>100.0</td>
</tr>
<tr>
<td>%</td>
<td>1.7</td>
<td>5.2</td>
<td>17.3</td>
<td>20.7</td>
<td>55.1</td>
<td>100.0</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

昭和26年8月現在の来往世帯について面接調査の結果による。

一般に都市よりの来往者が都市生活様式を認識し手間が生じる場合に、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者が東京の都市生活様式を認識し、都市生活様式を認識し手間が生じる場合に、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市的人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関して考慮すべき点である。また、来往者の都市の人格評価に関

「五○世帯」は都市外に職場を有する通勤者で、而も、その九六％が昭和十二年以後の来往者である。通勤者五○世帯

（昭和二六年）8月現在の来往世帯について面接調査の結果によった。
（注）現住人口数を性別に五歳毎に平均し、人口 1,000 中の比率に換算して全国都市人口及び全国農村人口の構成（共に 8.5 國勢調査統計）と比較した。以下 F.4 F.5 も同然
F.4 昭和26年現在蔵前内原住人口年齢・職業構成図
<table>
<thead>
<tr>
<th>種別</th>
<th>身分</th>
<th>人数</th>
<th>相当役位居住者人数（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>原住者</td>
<td>人</td>
<td>10</td>
<td>27.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>相当役位居住者</td>
<td>9</td>
<td>32.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>5</td>
<td>26.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>17.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>30</td>
<td>25.8</td>
</tr>
<tr>
<td>来住者</td>
<td>人</td>
<td>50</td>
<td>80.6</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>相当役位居住者</td>
<td>11</td>
<td>31.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>9</td>
<td>30.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>12.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>4</td>
<td>75.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>33.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>81</td>
<td>43.8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| 通勤者の原住者・来住者の家族における健康相関の例 |

<table>
<thead>
<tr>
<th>品目</th>
<th>数</th>
<th>長男</th>
<th>次三男</th>
<th>女子</th>
<th>弟弟</th>
<th>姉妹</th>
<th>同居</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>原住</td>
<td>10</td>
<td>9</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>来住</td>
<td>50</td>
<td>11</td>
<td>9</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>81</td>
</tr>
</tbody>
</table>

現在の世帯主の子ども数と、世帯主の年齢が一定の年齢範囲に達した場合に、通勤者の家族における年齢相関を示す。

<table>
<thead>
<tr>
<th>種別</th>
<th>身分</th>
<th>人数</th>
<th>相当役位居住者人数（％）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>原住者</td>
<td>人</td>
<td>10</td>
<td>27.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>相当役位居住者</td>
<td>9</td>
<td>32.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>5</td>
<td>26.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>17.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>30</td>
<td>25.8</td>
</tr>
<tr>
<td>来住者</td>
<td>人</td>
<td>50</td>
<td>80.6</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>相当役位居住者</td>
<td>11</td>
<td>31.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>9</td>
<td>30.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>12.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>4</td>
<td>75.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>33.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>81</td>
<td>43.8</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表12 現存婚出男子職業

<table>
<thead>
<tr>
<th>職業</th>
<th>現職在職</th>
<th>%</th>
<th>異出職業</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>農業</td>
<td>9</td>
<td>33.4</td>
<td>7</td>
<td>43.8</td>
</tr>
<tr>
<td>会社員</td>
<td>3</td>
<td>11.1</td>
<td>2</td>
<td>12.5</td>
</tr>
<tr>
<td>公務員</td>
<td>9</td>
<td>33.4</td>
<td>5</td>
<td>31.25</td>
</tr>
<tr>
<td>自由業</td>
<td>1</td>
<td>3.7</td>
<td>1</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>商業</td>
<td>3</td>
<td>11.1</td>
<td>1</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>工業</td>
<td>1</td>
<td>3.7</td>
<td>0</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>無職</td>
<td>1</td>
<td>3.7</td>
<td>0</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>不明</td>
<td>0</td>
<td>一</td>
<td>11</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>27</td>
<td>100.0</td>
<td>27</td>
<td>一</td>
</tr>
</tbody>
</table>

三男の都市外への流出に関する。昭和13年以後の世帯流
出日々の距離地方へ出してある。又、この事実から、先に述べた総
括的人口移動の方向に類似することが指摘されるならばならない。更に女子の出
婚に帰して、戸籍簿に基づいて第14表及び第15表

以上の通り、世帯主五人に対する比率は二四％である。世帯主と農業の相関性を示している。他方、地域面積に余裕のない

正九年（九〇年）以後二〇年間の村内住民は僅か三月、昭和十五年（九四〇年）以後現在迄の村内住民としては値

の職業に従事していた者は五六％、現在農業以外の職業に従事する者が五六％であるが、他の職業別の移動者の移動現象は農業

の職業の在住者を代替される移動現象を考慮するため、三月、昭和13年以後の世帯流
出及びその定住方向について一言しなければならぬ。資料の関係から

し、住宅別に婚出先及び嫁者処の家口の在住を観察するとき、時生を降らにしたがって郡部が減少し都市部が増加

に女子の通婚に関して、戸籍簿に基づいて第14表及び第15表

T.12 現存婚出男子職業
### T.13 昭和13〜26年間の世帯流出数
(但シ元年付有戸籍者を限る)

<table>
<thead>
<tr>
<th>郡部</th>
<th>都市</th>
<th>郡部</th>
<th>都市</th>
<th>国外</th>
<th>計</th>
<th>順位</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大阪市</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>都市</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td></td>
<td></td>
<td>5</td>
<td>(55.6)</td>
</tr>
<tr>
<td>郡部</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>計 (％)</td>
<td>0</td>
<td>(0)</td>
<td>5 (55.6)</td>
<td>(22.2)</td>
<td>(0)</td>
<td>2 (22.2)</td>
</tr>
<tr>
<td>順位</td>
<td>I</td>
<td>II</td>
<td>I</td>
<td>II</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### T.14 明治10年〜昭和26年婚出先（女子）

<table>
<thead>
<tr>
<th>郡部</th>
<th>都市</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>三村</td>
<td>三内</td>
<td>他村</td>
</tr>
<tr>
<td>三村</td>
<td>三内</td>
<td>他村</td>
</tr>
<tr>
<td>1877〜1886</td>
<td>19</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>M.10〜M.29</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1897〜1916</td>
<td>11</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>M.30〜T.5</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1917〜1936</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>T.6〜S.11</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1937〜1951</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>S.12〜S.26</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>22</td>
<td>56</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### T.15 明治10年〜昭和26年婚入者前住地（女子）

<table>
<thead>
<tr>
<th>郡部</th>
<th>都市</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>三村</td>
<td>三内</td>
<td>他村</td>
</tr>
<tr>
<td>三村</td>
<td>三内</td>
<td>他村</td>
</tr>
<tr>
<td>1877〜1886</td>
<td>9</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>M.10〜M.29</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1897〜1916</td>
<td>11</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>M.30〜T.5</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1917〜1936</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>T.6〜S.11</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1937〜1951</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>S.12〜S.26</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>22</td>
<td>56</td>
</tr>
</tbody>
</table>
四

T. 16 蔵坂内原住農家主婦の実家

<table>
<thead>
<tr>
<th>郵 郵部</th>
<th>農業</th>
<th>商業</th>
<th>公務員</th>
<th>会社員</th>
<th>自由業</th>
<th>不明</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>市</td>
<td>5</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>郵</td>
<td>18</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>23</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>29</td>
</tr>
</tbody>
</table>

一般に言えば、我が国農村人口構成の特色として、生産年齢人口が都市人口に比較するに、生産年齢人口が都市と連動した結果、蔵坂内農家主婦の実家は、農業と親近な職業と考えてよいところの実業経済を兼することである。

以上、住居移動と職業構成を、来住世帯及び原住世帯の夫々について観察した結果、蔵坂内農家主婦の実家は、農業と親近な職業と考えてよいところの実業経済を兼することである。
昭和26年在籍内現住人口年齢構成図

1. 地域の移動と人口構成

<table>
<thead>
<tr>
<th>都市人口構成線を超過する部分</th>
<th>農村人口構成線を超過する部分</th>
<th>都市農村人口構成線を超過する部分</th>
</tr>
</thead>
</table>

昭和5年全国都市人口年令構成線
昭和5年全国農村人口年令構成線

F.5 に見られる如く、青壮年層の人口によって充実させられること及び、五〇歳以上の部分が原住世帯の農業人口によって占められているという事実から、零細農家の定住性を支持してあるものがむしろ次の通勤現象にあると断じる。

注（之一）農村人口の都市集中は我の国の如く産業化が著しい。故にこの點に関する研究は数多く、中でも林憲省・本邦都市人口の構成と増
<table>
<thead>
<tr>
<th>年份</th>
<th>人口数</th>
<th>增长率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1925年</td>
<td>1,000</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
1. 地域の移動と人口構成

住通勤者のための借用家は、一軒もない。これ等來住者が主としてサラリーマン階級で、自宅で住居を建築して土着するこ

T.18 葉垣内全世界帯

<table>
<thead>
<tr>
<th>順</th>
<th>住帯</th>
<th>住帯数</th>
<th>同参加</th>
<th>住帯数</th>
<th>住宅一帯</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>31</td>
<td>86</td>
<td>I</td>
<td>3</td>
<td>50</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>38</td>
<td>II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

何れの指標においてても原住帯が優位である。18表19表20表における従属地帯のそれに比較して低く評価されるべきである。
### T.20 共同路
の役員数

<table>
<thead>
<tr>
<th>全堂</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>住居</td>
</tr>
<tr>
<td>(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>(2)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

#### T.19 葵垣内全世界带の家屋
所有形態における土着度

<table>
<thead>
<tr>
<th>家地持</th>
<th>信家</th>
<th>信問</th>
<th>總點</th>
<th>平均</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>信地</td>
<td>信家</td>
<td>信問</td>
<td>總點</td>
<td>信地</td>
</tr>
<tr>
<td>住居</td>
<td>(1)</td>
<td>(2)</td>
<td>(3)</td>
<td>(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>原生</td>
<td>112</td>
<td>12</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>住居所</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>住居</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>住居所</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>住居</td>
<td>8</td>
<td>18</td>
<td>10</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>住居所</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>住居</td>
<td>4</td>
<td>27</td>
<td>50</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>住居所</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

農業生活乃至、昔来の部落生活の表前である年長者と彼等の間に入都市化に關する態度に差違・対立を生ぎしめる要因をもつ。なお、この点については関箱

おいてもなお、都市化に対する強度の抵抗力を有すると言われならばならぬ。原住

者にとって祖先遺伝の農地及び農業は彼等の家集のシンボルであり、農地

解放によって地主土地所有の形態から新らしい土地所有の段階に入ると考えられた

者は土地所有の形態から見れば、一向に変化はなく、むしろ農業者の定着性はこの為に増加

して考えられる。

部落の都市化が社会的接触交渉を通じて推進される以前、部落内の接触交渉の

結果によって成しこの昭和二十六年七月における世帯主の都市における不規則の日常移動を観察することが

みられ、通勤者による規則的日常移動についての計は一つであるが、第22表は全世界带市主に対する不規則的日常移動の集計である。これ

を求めると大阪市が五〇人（五〇・九％）で最多多く、吹田・茨木両市はこれに次い

て二人（二・九％）、以下郡内他町村一〇人（一・〇％・六％）、村内及び大阪

二十七

（三・〇％）の順となる。
### T.21 昭和26年7月中現住世帯主の
不規則的都市移動

<table>
<thead>
<tr>
<th>原住者</th>
<th>一人分平均</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>順位</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>世帯</td>
<td>87</td>
</tr>
<tr>
<td>北東</td>
<td>64.9</td>
</tr>
<tr>
<td>東南</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>南西</td>
<td>65.8</td>
</tr>
<tr>
<td>西北</td>
<td>144</td>
</tr>
<tr>
<td>北西</td>
<td>51.3</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>258</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 規則的性質を帯びるもの例は急朝都市の市場へ取引の為に行く等の場合は一月を1回として計算した。